

わが心の自叙伝 菅原洋一

.....▷9

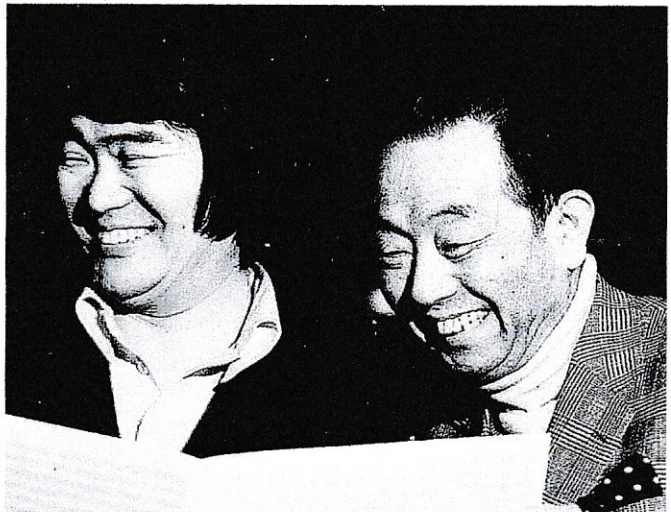
クラシック以外は音楽ではない、という考えの音楽大学教授たちの中で私の本心を見抜いていたのが恩師の関種子先生である。

音楽大学在学中に藤山一郎さんの「影を慕いて」のレコードの表面に入っていた古賀メロデー「日本橋から」や、「およばぬこととあきらめました」の「雨に咲く花」などのレコードヒット曲を持つという経緯がある関先生が当時、国立の教授だったのだ。

藤山さんや淡谷のり子さんはその後、流行歌手としての道を歩んだが、関先生はクラシックの世界を歩んでこられた。ほかの先生たちと同じく口では「軽音楽など駄目ですよ」と言いつつ、それは「絶対ダメ」という強さではなかった。私にとっては、なかなか話せる先生だったのである。

◆ 服部良一先生の下で

服部良一さん(右)と筆者



卒業間近になって先生から「あなたの声は軽音楽に向いているわね」と言われてドキリとした。ふるさとの父母からは「早く帰ってこい」と総攻撃されていた時期だった。都内のタンゴ喫茶などでアルバイトをしていた私の胸中をまるで見透かしたのである。

「君はタンゴに向いているね」

服部先生といえはそれこそ、淡谷さんの「別れのブルース」はじめ一連のブルースや藤山さんの「青い山脈」、笠置シズ子さんの「東京ブギウギ」など、日本のポピュラー音楽の草分け的存在でありヒットメーカーである。関先生の紹介となれば鬼に金棒といえる。多忙な服部先生にレッスンを受けるという幸運な道が開かれたのである。

その頃、服部先生は「日立コンサート」という定期的な音楽演奏会を開いていた。そこに弟子である練習生の私も、ほかの仲間たちとともに舞台に出演できるチャンスに恵まれたのである。バックの演奏はフルオーケストラに近い編成だったこともあり、毎回心躍る舞台だった。

こうして大好きな歌を歌うことができ喜びは言葉では言い尽くせないものだった。「歌を歌ってこの先、生きていけたらなあ」。ちょうどそんなとき、服部先生から意外な言葉を授か

る。「君はタンゴに向いているね」。天にも昇るような気持ちだった。もっとタンゴのことを知りたいと思い、当時、タンゴ研究の第一人者だった高山正彦さんの門をたたき、いろいろ教えていただいた。それがタンゴを理解するための最高の早道だったわけである。

アルバイト感覚だったタンゴ喫茶の出演も真剣に取り組みようになっていた。そんなある日のことだ。早川真平さんというタンゴバンドのリーダーが私を訪ねて来た。「うまくて若いのがいる」といううわさを聞き、訪れてきたというのである。

えっ？ 早川さんといえば、その当時、世界を股にかけて活躍、私のがど自慢で優勝して自転車をもらった「ジューラ・ジューラ」などを日本に知らしめた「タンゴの女王」ことランコ・フジサワ（藤沢嵐子）さんのご主人なのだった。（すがわら・よういち＝歌手）